

第5回 校長会議あいさつ

R.6.7.16 稲垣

大雨の影響や熱中症警戒アラートの発令によって、延期や中断を余儀なくされた競技もありましたが、中学校運動部の市内大会が終わりました。今月6日の土曜日の鶴城中学校で行われたサッカーでは、夕刻、にわかに嵐のような豪雨に見舞われ、突風によりテントは捻じり上げられるように煽られました。その勢いでアルミの支柱は中ほどから折れ、テントはひっくり返ってしまいました。幸いにも、天候の急変を察知した競技部長が、参加者全員を校舎内に避難させていたため、人的な被害は免れました。リーダーの的確な判断力が奏功した場面となりました。

本日は二点についてお話しします。

一点目は、学校教育の信頼感についてです。

教育は信用商売であると言われます。子どもたちや保護者、地域に信頼されていなければ、教育の成果は得られません。また、そのためには、教職員相互の信頼感や、学校・教育委員会などの組織の信頼感も不可欠です。信頼感を高めるのは、先生方の毎日の地道な教育活動の積み重ねであり、それは小さな数の足し算の継続のようなものです。一方、信頼感を損ねるのは、たった一回の、千分の一人の信用失墜行為であり、それはともすると小数点以下のかけ算になってしまいます。

この度の不祥事は、あまりに遺憾な、本市学校教育の信頼感を揺らがせかねないものです。教職員の服務監督責任を有する教育委員会としては、このことを肝に銘じ、これまで以上の熱意と覚悟をもって、子どもたちや保護者、地域の信頼回復に努めていきます。また今後、各学校においても、本市の学校教育を高めるべく、教育活動にいっそう尽力していただきたいと思います。

二点目は、コロナ禍についてです。

今年度前半の学校訪問が終わりました。いずれの学校も落ち着いた雰囲気の中で、子どもたちの元気な姿が見られました。その中で、一つ気がかりなことがありました。コロナが5類に変更されて一年余、一般社会では日常生活が戻ってきているようですが、残念なことに学校では、未だコロナ禍を抜け出せないでいる状況が残ってしまっています。コロナ禍における「三密回避」は、教育活動の大きな妨げとなりましたが、そのダメージからの脱却に苦慮しています。学校行事の盛り上がりや、和やかな

給食は取り戻すことができました。しかし、授業中の発言や話し合いによる追究活動等は、なかなか以前のレベルに追いついてきません。これは、三年間近く一斉講義式の授業だけをせざるを得なかったことに起因しています。また、マスクによって表情が見えづらく、心情の機微が伝わりにくいため、子ども同士の広く円滑なコミュニケーションが抑制され、ひいては子ども集団内の安心感を低下させていることも考えられます。

マスクについては、国の通知で、個人の事情に配慮し、着脱を強いてはならない旨が知らされており、それが学校での指導を躊躇させている側面があります。しかし、体育の時は、熱中症予防という理由で、原則全員に外させています。さらに給食時では、特段の指導をしなくても、子どもたちはマスクを外して話しながら食べているのです。にもかかわらず、その他の場面でマスクをつけた生徒が目立つのはなぜでしょうか。先の日曜日の新聞報道に「長袖を脱がない子どもたち」という記事がありました。周囲に迷惑をかけたり、ルールに違反しない限り、個人の自由は保障されるべきであることには同意します。しかし、私たち教育者が見つめるべきは、子どもたちの心の内です。ある中学校で実施したアンケートによれば、マスクを着けている生徒のうち、8割以上の生徒がマスクを外したいと思っているにもかかわらず、「周りのみんなが着けているから外せない」と困惑していることが分かりました。今、子どもたちの多くがそういう気持ちでいるとしたら、学校において、これが指導し切れず、乗り越えられないでいることは、大きな問題です。子どもたちが安易で弱気な態度へ流されるこの風潮は、向上心を鈍らせかねないし、不登校の増加にも影を落としていると考えられます。子どもたちの適切な判断力や辛くても頑張っていこうとする姿勢を弱めてしまったことこそが、教育現場における最大のコロナ禍であると捉えることもできます。この点については、今後、各学校でも取り組んでいきたいと思っています。